様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１７３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２０７２

研究課題名（和文）小規模島嶼におけるジオツーリズムと地域イノベーションに関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Study on Geotourism and Regional Innovation in Small Island

研究代表者
深見　聡（FUKAMI, Satoshi）

長崎大学・水産・環境科学総合研究科（環境）・准教授

研究者番号：２０５１０６５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、小規模島嶼及びその関連地域を対象とし、ジオツーリズムを持続可能な観光の一形態と位置づけた上で、地域に与えるプラスやマイナスの影響について把握し、今後の持続可能な観光の方途について検討を加えることを目的としておこなった。
その結果、ジオツーリズムやエコツーリズムなど、観光形態を指す用語の違いはあるものの、持続可能な観光を指向するうえで、今後我が国に表出するコミュニティ維持の困難さが先行してみられる小規模島嶼では、観光対象となる自然資源や文化資源を保全する担い手不足も深刻化していることが明らかになった。その際、観光客と地域住民との相互啓発の場としての観光教育の充実の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、我が国が直面している急激な超高齢化と人口減少の進展といった社会構造の変化に対して、観光は条件不利地域とされる小規模島嶼やその周辺地域においても有効な活性化の方途であることを示した。同時に、経済的効果への過度な傾倒は結果として持続的な地域社会の維持にはプラスに作用せず、むしろ観光客と地域住民とが相互に出会う場面(体験やガイドなど)の創出による社会的効果へ注目することが重要となることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： The subject of this study was small islands and the surrounding areas. The purpose of the study was, while placing geo-tourism as one of the sustainable forms of tourism, to study ways to promote sustainable tourism after understanding positive as well as negative impacts potentially given to the community.
  There are different terms, such as geo-tourism and eco-tourism, that indicate some forms of tourism. Irrespective of the difference, it was found out in the study that while aiming for a sustainable form of tourism, a shortage of human resources for conserving tourist attractions in addition to a shortage of bearers in the community are becoming increasingly serious issues. The challenges of maintaining communities, which are rising problem in our country, has already been pre-existing in the small islands. An importance of providing improved tourism education as mutual learning opportunities for tourists and the local residents was pointed out.

研究分野：観光学

キーワード：ジオツーリズム　エコツーリズム　持続可能な観光　ジオパーク　世界遺産　島嶼　環境保全　観光教育

１．研究開始当初の背景

21 世紀に入り、我が国は超高齢化と人口減少の急激な進展の渦中にある。それに呼応するように、さまざまな地域の活性化の維持に向けた施策がとられてきた。その際、定住人口から交流人口の拡大へと地域間の移動を促す観光に対する期待は高まっている。とくに、その土地固有の自然や文化といった有形・無形の地域資源を活かした観光を地域づくりと一体化してとらえる取り組みは、全国の自治体のほとんどが模索を続け今日に至る。その結果、ジオツーリズムやエコツーリズムなど、地域（ホスト）側が主役となる着地型観光（Community Based Tourism）の必要性は、さまざまな観光形態の用語に変換されつつも、それぞれの地域に長く利益をもたらす「持続可能な観光」の言葉の台頭が象徴しているといえる。

観光の持続的な展開を図るには、まずは外部からの来訪者（観光客）なくして成立しない。そして、見どころとなる観光対象、両者をつなぐ情報や移動手段を提供する観光資本の 3 つの要素に加えて、観光対象を保全・承継してきた地域住民の存在が欠かせない。地域社会（コミュニティ）が主体性をもって観光客を迎え入れることこそが、これからの観光が地域に根差したものへと質的な転換につながっていくと考えられる。

本研究の課題名にも掲げているジオツーリズムは、地域が主役となる着地型観光、持続可能な観光を具現化する代表的な用語の一つとして知られる。地域資源を「大地の遺産」と位置づけ、自然環境と人間環境の調和的共生を強く意識している。ジオツーリズムが展開される地域の一つであるジオパークは、我が国の場合、多くが条件不利地域に分布し、とりわけ島嶼部での認定地や構想地が増加している点が特徴的である。

２．研究の目的

本研究は、ジオツーリズムやそれらに関連する世界遺産やジオパークの「登録・認定の前後」という動態的事象において表出する、地域イノベーションの過程の解明に着目して、観光研究の発展に寄与することを目指したものである。具体的には、持続可能な観光を目指す小規模島嶼を対象として、実質的にジオツーリズムが展開されている地域におけるイノベーションと観光学の果たすべき役割について、実証的に明らかにすることを目的に研究をすすめた。主要な研究の柱は、次の 3 点である。

(1) 小規模島嶼を対象としたジオパークにおけるジオツーリズムの現状把握

2015 年 9 月に、日本ジオパーク「三島村・鬼界カルデラジオパーク」に認定され、かつ、2016 年 4 月に成立・公布の有人国境離島地域の保全及び特定有人国境離島地域に係る地域社会の維持に関する特別措置法（通称：国境離島新法）における対象島嶼から構成される鹿児島県鹿児島郡三島村を対象として、ジオパークの認定の前と後における、とりわけ島民の持続可能な観光としてのジオツーリズムに対する意識の変遷を、地域イノベーションの視点から把握を試みた。

(2) 小規模島嶼及びその関連地域を含む条件不利地域を対象としたジオツーリズムの動態的展開過程の把握

ジオツーリズムは、「Geo as Eco」との表現があるように、エコツーリズムや世界遺産における観光現象も包含しうる意味合いを有している。そこで、実質的にジオツーリズムが展開されている地域のイノベーションと観光学の果たすべき役割について、2015 年 7 月に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」を構成する端島（通称：軍艦島、長崎市）や高島（長崎市）、2018 年 6 月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の位置する五島列島やその関連地域（本土側に位置する長崎市外海地区）を事例として、ジオツーリズムと世界遺産の観光との関わりについて、ポリティクス的視点を踏まえた地域イノベーションの特徴について検討を加えた。また、同様に、世界自然遺産候補地の奄美大島と候補地を補完する沖永良部島、我が国における世界自然遺産登録第一号の屋久島（鹿児島県屋久島町）、桜島・錦江湾ジオパークの核心地域である桜島（鹿児島市）においてもフィールドワークを実施し、世界遺産登録地との比較考察をおこなった。

また、国境離島新法の対象島嶼から構成される甑島（鹿児島県薩摩川内市）を対象として、地域資源を活かしたジオツーリズムに対する当事者の意識の把握を試みた。

(3) 小規模島嶼のうち国境島嶼に関する認識の把握

我が国は海洋国、島嶼国であり、小規模島嶼のうち国境島嶼の果たす役割は大きなものがある。その基礎的認識について明らかにするために、韓国と領土問題が生じており、韓国が韓国ジオパークに認定したと報道されている竹島（韓国名：独島、島根県隠岐の島町）と、尖閣諸島（沖縄県石垣市）といった小規模島嶼への現状認識を明らかにし、今後、ジオツーリズムの有人・無人の小規模島嶼への援用を図る際の課題について、周辺諸国との国際関係の視点から把握を試みた。

３．研究の方法

前述の目的を達するために、それぞれの対象地域や関係自治体等において観光客や地域住民、自治体職員への聞き取り調査、文献収集、各種行事への参与観察などによりデータを取得した。そのうち、上述の 3 つの研究の柱に沿って方法の概要を示す。

(1) 小規模島嶼を対象としたジオパークにおけるジオツーリズムの現状把握

三島村・鬼界カルデラジオパークに認定されている三島村役場および村内の薩摩硫黄島、竹

島に暮らす住民に対して、それぞれヒアリング調査、インタビュー調査、ライフヒストリー調査を実施した。役場からはジオパーク専門職員、住民からは硫黄島出身で退職を契機にＵターン移住した60歳代男性と、竹島在住のＵターン移住者である30歳代男性が応じた。聞き取りにあたっては、非統制的な自由な発話の収集に努め、KJ法による集約・類型化をおこなった。

(2) 小規模島嶼及びその関連地域を含む条件不利地域を対象としたジオツーリズムの動態的展開過程の把握

自治体関係として対象としたのは、世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」では、構成資産が位置する長崎県庁世界遺産課、長崎市役所世界遺産推進室、「屋久島」では屋久島町役場環境政策課、世界遺産登録を目指す「奄美・沖縄」では鹿児島県奄美パーク、日本ジオパークに認定されている「桜島・錦江湾ジオパーク」では鹿児島市役所観光企画課（桜島・錦江湾ジオパーク推進協議会）、日本ジオパークの認定を目指している「五島列島ジオパーク構想」では五島市役所政策企画課（五島列島ジオパーク推進協議会）、関係自治体として、ユネスコ世界ジオパークに認定されている「島原半島ジオパーク」の島原半島ジオパーク協議会である。各所に、ヒアリング調査、質問紙調査をおこなった。また、地域住民や観光客に対しては、参与観察、インタビュー調査、ライフヒストリー調査を用いて自由な発話の収集に努め、KJ法による集約・類型化をおこなった。

(3) 小規模島嶼のうち国境島嶼に関する認識の把握

小規模島嶼に関する若年層の現状認識を明らかにするために、長崎大学環境科学部学生を対象とした質問紙調査を実施した。それらを、測定尺度による回答に関しては量的分析（クロス集計、χ二乗検定等）、自由記述による回答に関してはKJ法による集約・類型化をおこない、2016年に同様の調査をおこなった結果との経年比較をとおして、とくに国境島嶼に関する認識の特性の把握にあたった。

４．研究成果

結果、下記の3点について、研究者や専門家、国や自治体関係者のみならず、本来、ジオツーリズムが持続可能な観光の一形態として地域イノベーションを創出するためには、観光対象となる自然や文化といった地域資源を連綿と保全・承継してきた主体である地域住民（コミュニティ）をはじめとする多様なステークホルダーが、観光客の急増やマナーの悪化といった、いわゆる観光公害（オーバーツーリズム）の発生を抑制することと、そのための政策導入の検討にあたることの重要性が実証的に明らかになった。それらは大要4点に整理できる。

(1)地域資源の保全・承継に加えて、観光という新たな要素が加わる場合、たとえば世界遺産では国立公園指定地の拡大や、緩衝地帯の設定がなされるが、ジオパークや類似の制度においても同様の適正利用の個別設定の検討が不可欠である。

(2)観光客の増加を招くジオパーク認定や世界遺産への登録に対しては、地元における一定のコンセンサスを得るための性急さはむしろ逆効果の結果を招来することである。その一例として、2018年に沖縄県庁が「奄美・琉球」に含まれる西表島の島民に実施したアンケート調査によれば、「島民の41%が登録を望ましいとは考えておらず（肯定的は28%）」、その理由の筆頭に来訪者増による自然環境の劣化への懸念が挙げられていたのが象徴的といえる。専門家や国、自治体行政レベルでの議論の蓄積と、住民への価値共有が浸透していく時期には、タイムラグが生じてしまう。そのため、保全・承継の主体としての地域住民が、観光現象への理解を深める場（観光教育の機会の創出）を、地道に重ねる必要性が示唆された。

(3)地域コミュニティ側が、観光現象とは「恩恵」や「損害」といった正負のインパクトのいずれも、観光業界内にとどまらない点や、たとえば観光客は「自然を楽しみ」に目的地に足を運んでも、同時に、文化的景観の審美性や食への満足を求めるという特徴を事前了解しておく必要がある。すなわち、自然環境と人間環境の相互性は不可欠な視点であり、地域の観光をめぐるコンセンサスのプロセスの明確化が、短期的には経済的効果が表れにくくても、中長期的には社会的効果の浸透がみられることで、観光の持続可能性を高めるという効果につながる地域イノベーションの創出に結実していくと考えられる。

(4)本研究をすすめていくことで、小規模島嶼を中心とした条件不利地域におけるジオツーリズムなど持続的な観光と地域イノベーションの関係性は、観光現象の当事者であるホストとゲストの邂逅を基盤とする観光教育や、学校教育における社会科系科目を活用した観光教育の充実の必要性が強く示唆されたが、本内容に関しては本格的な調査をおこなうまでには至らなかった。観光教育の役割は、地域イノベーションを検討するうえで不可欠なものであり、今後の研究課題として注目していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１３件）

① 深見聡・沈智炫、世界遺産観光における観光教育の重要性―「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を事例に―、日本観光研究学会全国大会学術論文集、査読無、33、2018、265-268

② 深見聡、身近な地域に向ける目を広げてくれる野外＋言語活動、社会科教育、査読無、55(12)、2018、14-15

③ 深見聡、地理教育における領土教育の重要性(第 2 報)―大学生を対象とした 2018 年及び

2016年の認識調査結果の比較考察から―、地理教育研究、査読有、23、2018、29-38
http://hdl.handle.net/10069/38701

④ FUKAMI,S.,SIM,J., World Heritage Tourism and Dark Tourism: A Case Study of "Hidden Christian Sites in the Nagasaki Region",Japan. Academia Journal of Environmental Sciences, 査読有、6(1)、2018、11-19
DOI：10.15413 / ajes.2018.0303

⑤ 深見聡、沈智炫、世界遺産観光とポリティクス―軍艦島の事例から考える―、日本観光研究学会全国大会学術論文集、査読無、32、2017、233-236

⑥ 深見聡、新学習指導要領における領土教育の"正常化"、地理教育研究、査読有、21、2017、36-38

⑦ 深見聡、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」とダークツーリズム―ゲストとホストの邂逅の視点から―、観光学評論、査読有、5(2)、2017、185-196

⑧ 深見聡、沈智炫、長崎における世界遺産観光―「明治日本の産業革命遺産」と「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のこれから―、九州地区国立大学教育系・文系研究論文集、査読有、4(1・2合併)、2017、1-8
http://hdl.handle.net/10069/37576

⑨ 深見聡、沈智炫、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」にみる世界遺産観光の展望、日本観光研究学会全国大会学術論文集、査読無、31、2016、181-184

⑩ 井出明、鈴木晃志郎、深見聡、須藤廣、近代化産業遺産とダークツーリズム―産業社会の光と影を考える―、日本観光研究学会全国大会学術論文集、査読無、31、2016、353-356

⑪ 深見聡、地理教育における領土教育の重要性―大学生を対象とした領土に関する認識調査から―、地理教育研究、査読有、19、2016、1-10

⑫ 深見聡、三島村・鬼界カルデラジオパークにおけるジオツーリズムの取り組み、島嶼研究、査読有、17(2)、2016、1-19

⑬ 深見聡、長崎の観光と世界遺産―産業革命遺産と教会群のこれから―、地理、査読無、61(7)、2016、32-40

〔学会発表〕（計２０件）

① 深見聡、「奄美・沖縄」の世界遺産登録に向けた問題点―観光の社会的効果の視点から―、日本観光学会、2019年3月16日、南山大学（名古屋市）

② 深見聡、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」をめぐる世界遺産観光と地域の進化、進化経済学会、2019年3月16～17日、名古屋工業大学（名古屋市）

③ 深見聡、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録と観光現象－対象の拡大、2018年度越境地域政策研究フォーラム、2018年12月22日、愛知大学（愛知県豊橋市）

④ 寺本潔・宍戸学・中村哲・深見聡・高嶋竜平・澤達大、確かな観光人材育成へ向け、学校教育の役割を考える、日本観光研究学会、2018年12月15～16日、跡見学園女子大学（東京都）

⑤ 深見聡、沈智炫、世界遺産観光における観光教育の重要性―「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を事例に―、日本観光研究学会、2018年12月15～16日、跡見学園女子大学（東京都）

⑥ 深見聡、奄美群島の右肩上がりはどこまで続くか？：沸騰している観光需要、経済地理学会、2018年12月8日、鹿児島県大島支庁会議室（鹿児島県奄美市）

⑦ 深見聡、奄美の世界遺産登録と持続可能な観光への展望、経済地理学会、2018年12月8日、鹿児島県大島支庁会議室（鹿児島県奄美市）

⑧ 深見聡、大学生の国境島嶼と領土教育に関する意識―2016年と2018年調査結果の比較から―、全国地理教育学会、2018年8月18日、島根大学（島根県松江市）

⑨ FUKAMI,S.,SIM,J., The Present Condition and Issue of the World Heritage Tourism in "Gunkanjima"(Hashina-Island), Nagasaki, Japan. 進化経済学会、2018年3月29～30日、九州大学（福岡市）

⑩ 深見聡、長崎観光における軍艦島とは―錯綜する"まなざし"の行方―、日本観光学会、2018年3月17日、南山大学（名古屋市）

⑪ 深見聡、沈智炫、世界遺産観光とポリティクス―軍艦島の事例から考える―、日本観光研究学会、2017年12月2～3日、金沢星稜大学（石川県金沢市）

⑫ 深見聡、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」における世界遺産登録運動と地域社会の相克、観光経済経営研究会、2017年9月12日、立教大学（東京都）

⑬ 深見聡、国境島嶼に関する地政学的教育の役割と課題、日本島嶼学会大会、2017年9月1～3日、薩摩川内市里公民館（鹿児島県薩摩川内市）

⑭ 深見聡、隔絶性の高い小規模島嶼におけるジオツーリズムと地域イノベーション、進化経済学会、2017年3月24～25日、京都大学（京都市）

⑮ 深見聡、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」とダークツーリズム、観光学術学会、2017年2月19日、和歌山大学（和歌山市）

⑯ 深見聡、三島村・鬼界カルデラジオパークにおける持続可能な観光の展開、国公私3大学

環境フォーラム、2016 年 12 月 16 日、福岡工業大学（福岡市）
⑰ 井出明、鈴木晃志郎、深見聡、須藤廣、近代化産業遺産とダークツーリズム―産業社会の光と影を考える―、日本観光研究学会、2016 年 12 月 3～4 日、江戸川大学（千葉県流山市）
⑱ 深見聡、沈智炫、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」にみる世界遺産観光の展望、日本観光研究学会、2016 年 12 月 3～4 日、江戸川大学（千葉県流山市）
⑲ 深見聡、大学生にみる国境島嶼に関する現状認識と地理教育の果たす役割、全国地理教育学会大会、2016 年 11 月 28 日、文京学院大学（東京都）
⑳ 深見聡、世界遺産観光と地理教育、観光教育―長崎の事例から―、九州高等学校地理教育研究会、2016 年 7 月 27 日、セントヒル長崎（長崎市）

〔図書〕（計２件）
① 深見聡、メディアボーイ、真実の潜伏キリシタン関連遺産（井出明監修）、2018、95 頁（担当 pp.8-50、pp.56-59）
② 深見聡、朝倉書店、図説 日本の島―76 の魅力ある島々の営み―（平岡昭利、須山聡、宮内久光編著）、2018、180 頁(担当 pp.126-127)

６．研究組織
なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。